

外国の文献から

『心情と知性の教育』

—日本の就学前と小学校教育に関する考察—

第八章 よい学校とは？

吉村 香

学校が生徒に配慮すればするほど、生徒は学校教育の問題にぶつかる（トーマス・サージョバンニ『道徳的リーダーシップ』より）。

日本の子どもたちは、誰もが最善の努力によっ

て自らの役割を果たす“ことを教えられる。それは近代日本の成功の基礎的精神であった（デボラ・ファローズ）。

学校は子どもの社会的・道徳的発達を形成する

場である。そして賞罰もしくは何が正しいかを示すことで子どもを動機づける場である。学校はすべての子どもに平等な(時として規範的な子どもにより多くの)リーダーシップを与える。そして忍耐・努力・友情など全員が達成可能な目標を共有する一方、子ども同士が競合する場でもある。我々はよい学校というと学術的達成度で定義しがちだが、それは子どもの社会的・道徳的発達に比べれば二の次なのである。

日本の学校は社会的・道徳的発達を

促しているか？

日本の学校は学術的達成度を強く求められる。では子どもの社会的・道徳的発達についてはどうだろうか？ 非行や中退、自己破壊的行為は社会的・道徳的発達を損ねた青年の代名詞となっているが、そのような子どもの数は、日本は他の先進国に比べて少ない割合を示している。日本の非

行は他の先進国より穏やかで数少ない”ともいわれているのだ。

学校に関する問題

いじめ・落ちこぼれ・不登校・校内暴力などの問題についてアメリカの教育者たちは自国の状況を楽観的に評価しているが、日本の教育者は日本の現状に強い懸念を抱いている。こうした問題の多くは小学校から始まっており、受験の圧力が下位学年の方向へはたらいっている事実と関連があるといわれる。

学校嫌いのため年間五十日以上欠席している不登校の中学生は、日本では一九六六年から一九九〇年までに三倍以上に増え、一〇〇〇人中七・五人にのぼっている。同じ時期に小学生の割合は二倍に増加したが、その数は一〇〇〇人中一人にとどまっている。

アメリカのある小学校長が言うには、児童数四〇〇〇八〇〇人の小学校では一人以上の不登校児

童がいても珍しくないそうだ。一〇〇〇人に一人の不登校児童の存在を深刻に考える日本とは大違いである。つまり両国の統計を直接比較しても、さほど意味がないことになる。数字のもつ意味が異なるからだ。

しかし日本の不登校児童の約四十パーセントが通学できるカウンセリングセンターに出席していることで、不登校児童の統計に加算されていないことを考慮すると、日本の実態は統計上の数値を上回ることがわかる。

校内暴力

総務庁の調査によると、一九八〇年代半ばから小・中・高校ともに校内暴力の件数は端的に減少している。それは教師たちの自覚と介入の効果も含まれている。ただ我々が残念に思うのは、統計では知ることのできない校内暴力が多く存在することである。

校内暴力は中学生に最も多く、また大規模校は

ど頻発している。小学生では教師の介入を要する事件のうち、校内暴力は十六パーセントで、仲間はずれ・からかいが多くを占めている。

自虐行為と非行

日本の未成年者のうち逮捕された経験のある者は、アメリカの四分の一と統計では割合が低い。だが他の統計によると日本の青年たちは、不法な薬物には手を出さなくともある種の自虐行為にめり込んでいるという。一九九〇年に警察がシンナーで補導した未成年者は二万二〇〇〇人以上だそうである。

殺人は、アメリカの十五、十九歳の少年が犯した件数は、日本のそれより三倍である。三〇〇〇人の日本の高校生に調査したところ、彼らは中国



とアメリカの高校生に比べて、ストレスや学校の成績への不安、攻撃性、鬱などの感情を報告することが少なかった。

また、日本は十代の妊娠、中絶の割合が世界でもっとも低いとされている。しかし日本人の十代の若者の約六十パーセントが、男女の性的関係をもつことについて「適切な避妊をすれば認める」と解答しているのである。

学校への要望

日本の子どもたちの問題が、諸外国に比べて統計上低い割合なのは、日本の学校教育の特徴でもある。日本の幼稚園、小学校を観察すると皆、子どもの意欲、かかわり合い、活動における役割に注目する。

日本の五、六歳児の八十パーセント以上が、幼稚園に満足していると述べている（これに対して日本の中学生は約六十パーセントしか同じ回答をしていない）。同様に、四、六歳児の約八十五

パーセントが自分は幸せだと回答した。NHKの調査では、四、六歳児の半数以上が何一つ心配も問題も感じていないものの、四人に一人は学校入学試験に、また約八パーセントが暴力に不安を抱いているという。

中国・日本などアジアの小学生はアメリカの小学生より学校を好み、満足している傾向がある”と指摘したのはステイブソンらである。土田は日本とアメリカの四歳児を比較研究し、日本の幼児の方がより幼稚園を好んでいると述べた。

まとめ

日本の教育は小学校ですら問題を抱えている。校内暴力・不登校などが新聞や雑誌で大きく取りざたされているのが現状だ。そして、ほとんどの問題は中学で急増している。そのため教師たちの間で中学校の改善を要求する声が高まっている。

殺人は、国際比較データによれば日本はアメリカより割合が低く、頻度は下降傾向にあるように

ある。

日本とアメリカは社会状況が異なるため、一方の小学校が他方より優れているとはいきれない。多くの場合、日本の学校で有効な教育方法はアメリカには適さないのである。しかし幼稚園の場合日本の教育方法と、アメリカで知的・社会的発達を促しているとされる幼稚園の教育方法は酷似している。実際、子どもの社会的・道徳的発達を日常の実践で個々に応じて開化させようとするアメリカの幼児教育者は、日本と同様の教育方法を用いているのである。

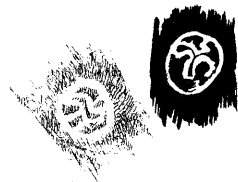
子どもの要求に合致すること

「学校が子どもの要求に合致すると、子どもは学校のことを懸念する」というのはアメリカでのある研究成果である。所属・自律・能力は子どもが学校に親しむのに重要な基本的心理学的要求である。

所属の要求は、子ども

もの親密で支持的人間関係にかかわる。この人間関係とは西欧や日本で人間発達の理論として一般的な、子どもの情緒的・社会的発達の基礎である。我々のみる限り、日本の小学校では様々な方法で人間関係を助長している。教師は家族的な小グループで、子どもたちが快適に話しやすい雰囲気をつくっている。

自律の要求は、子どもたちがコントロールされていると感じることや、責任や圧制的な制限から自由でいることを指している。日本の学校は様々な方法で子どもの自律を促している。すべての子どもが順番でリーダーシップをとるように配慮している。また教師による評価より自己評価を、大人に管理されるより自己管理を強調しているの



ある。

能力の要求は、達成感にかかわる活動を追求することにつながる。子どもは他者から報酬を受けなくとも自発的に世界を探究し、感覚を養おうとするものである。

日本の学校では子どもの考えに則って、興味深そうな作業に子ども自身がかかわることで活動が展開される。例えば第七章で紹介した水に浮かぶボートづくり、理想のあそび場の設計、学校めぐりなどである。このような活動は、固定化した基礎スキルに焦点化した教育的世界よりも、子どもたちの能力の要求に合致しているようである。つまり日本の幼稚園と小学校では、自律・所属・能力という基本的な要求に合致した多くの物質を備えている。そして逆に、子どもたちは学校や学校で強調している価値観を懸念しているようである。

アメリカでの日本の実践の限界―状況の考慮

筆者はアメリカの教育実践に、考え方の素材として日本の実践を取り入れることを肯定していない。理由は次の二点である。第一に、日本の実践はアメリカの価値観から離れていること。第二に、日本の実践はアメリカにおいては実践的でないことである。

子どもの状態

日本の子どもはアメリカのある研究者に言わせると、「特権的世界」に生きているという。乳児死亡・栄養不良・虐待・両親の薬物依存・貧困などの問題に照らすと、日本の子どもは他の先進国に比べても大変恵まれている。家庭に困難のある子どもをどのように教育するか、という悩みは日本の教師は滅多に抱くことがないが、アメリカの教師の多くが抱えている。つまり食物・住居・大人

の注意などの子どもの基本的要求に関して、日本とアメリカでは重要度が異なるのである。

日本の学校では教育実践の目的は安定性・大人と子どもの（または子ども同士の）信頼関係を発達させることにある。日本の教師たちは、アメリカのように多くの子どもが不遇の家庭環境にあるとしたら、それでも教育技術を駆使することができらるだろうか。日本の幼児は、幼稚園で物質的環境づくりをされ、不適応行動も許容されることで、服従とは異なる形で人間関係を形成しているのである。

カリキュラム

日本では国により統一されたカリキュラムを実践している。現に筆者も、三つの小学校で非常に似通った“母親の仕事”という一年生の授業を見た。どの授業も母親の仕事を二十四時間観察する宿題を課していた。三人の教師が示した実例は異なるし、子どもたちも異なる活動（描画や作文）

に従事していたが、基本的な内容は母親の仕事に対する適切な見識と評価、手伝いのあり方を認識させるものであった。

概して日本の教師はどの教科も、重要な一つの目標や探求すべき問題を追求している。詳細なマニュアルがあるので、教師はそこから重要な概念や知識を選出する必要もなく、子どもの関心や動機の所在すら考えなくていい。

アメリカの教師は標準的なカリキュラムを巧妙に解釈して用いるよりも、独自のカリキュラムと教材を創造することが求められ、逆にそれが教育に有害となることもある。独創性に欠けると教師は非難され、標準的な授業は、たとえ技術的でもよい評価を得られないのである。



以上二つのモデルは、技巧的で革新的な教師によるもので、東西の異なる文化を反映している。

教師の地位

日本とアメリカの家族を対象に行った比較研究で、日本の親たちは子どもを放任していながら権威への敬意を強調していることがわかった。日本の教師は、そのような権威尊重の文化に支えられてアメリカより楽に仕事をしている。

おそらく教師の立場（地位）と権威が確固としていれば、日本のように子どもと温かく親密にかかわり、教育愛と子どもと共にあそぶ心をもつのが容易なだろう。

評価

日本の小学校では算数・社会その他の教科で単元の終わりに児童が重要事項を身につけたかどうかテストする。それは、教師自身の授業のあり方をテストすることでもあると言う教師もいる。多くの教師は市販のテストを用いているが、国から

課されたテストもある。

まとめ

本章では、日本で行われている授業をアメリカに應用するのを困難にしている両国の小学校教育の違いを探索した。日本の子どもは万全に守られ、教育を受けている。教師は統制された綿密なカリキュラムに支えられ、安定した地位を約束されている。彼らは知的発達のみならず社会的・道徳的発達をも重視する国家カリキュラムに支えられているからだ。

このような違いを前提に、我々は日本からどのような授業を学べるのだろうか。最も妥当なのは、日本の学校が子どもに社会的・道徳的発達に専心している点に注目することだろう。教師が多くの時間を費やして子どもに人間関係形成と共通目標を分かちあうことに苦心している点である。

また日本の教育が単に、子どもの社会的・人間的成長発達にのみ重点を置いていたのではなく、

知的な面も追求している点も学ぶべきことである。しかも子ども同士の競争を煽るのではなく、授業その他すべての活動において、子どもの社会的・人間的・知的発達を目的とする計画がなされているのである。

子どもの内なる要求に合致するという問題は、アメリカで最も成功しているといわれるプログラムでも主眼とされている。日本の学校でも、所有

・友情・自尊心・探求
といった子どもの内なる要求に応えるための鍵を見出している。

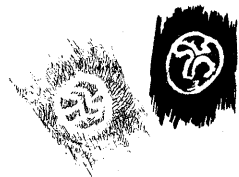
今後我々は、何を求めて子どもの教育をみていくべきなのだろうか。

全体のまとめ

以上第一章から第八章をふまえ、次のことを結論としたい。

日本の企業が成功する秘訣は、短期の利益より長期の目標に焦点をあてることだそうさ。日本の

教育にも同じことがいえそうである。子どもが時間をかけて価値観を内面化することを、即時の従順より重視し、責任ある学習者となることを来年のテストの結果より重んじることが、成功の秘訣



であるようだ。

アメリカの教師たちも教育の長期的目標とそれを達成する条件、すなわち子ども同士の協力関係や意味あるカリキュラムと援助を強調したいと考えている。だがアメリカの教師は長期的目標に必要なクラスの雰囲気、責任やスキル獲得への関心が損ねることに気づく。アメリカの教育は歴史的に、知的発達と社会的発達という両極の間を揺れ動いてきた。

その点日本の幼稚園と小学校は、振り子を揺らす必要がなかったといえる。友情・所属・親切などの目標を知的発達と融合させられる条件が揃っていたからである。学校は競争によって子どもを動機づけるよりも、自己批判的反省や目的共有の感覚を子どもに養わなければならない。すべての子どもは教師の熱意に触れたり、他人に貢献できることを喜ぶ経験の方が賞罰よりも大きな喜びなのである。

このような教育の実現には、広いビジョンが必要となる。学校教育が知的発達のみならず社会的・道徳的発達をも形成し、三つの側面の発達を助長するために意図すべきだということに理解あるビジョンである。例えばよい理科のカリキュラムは科学的概念の習得と同様、子ども同士の協力や科学への独創的な関心を喚起するものである。

またこのビジョンは、子どもにとって親密で支持的な人間関係が、決して快適なばかりではないことにも理解がなくてはならない。これは子どもの社会的・道徳的発達の本質である。活気ある学習における苦しい作業の本質でもある。

日本の幼児教育はその長所・短所ともに、アメリカの教育を見直す大きな手がかりをあたえてくれる。